

平成二十一年度

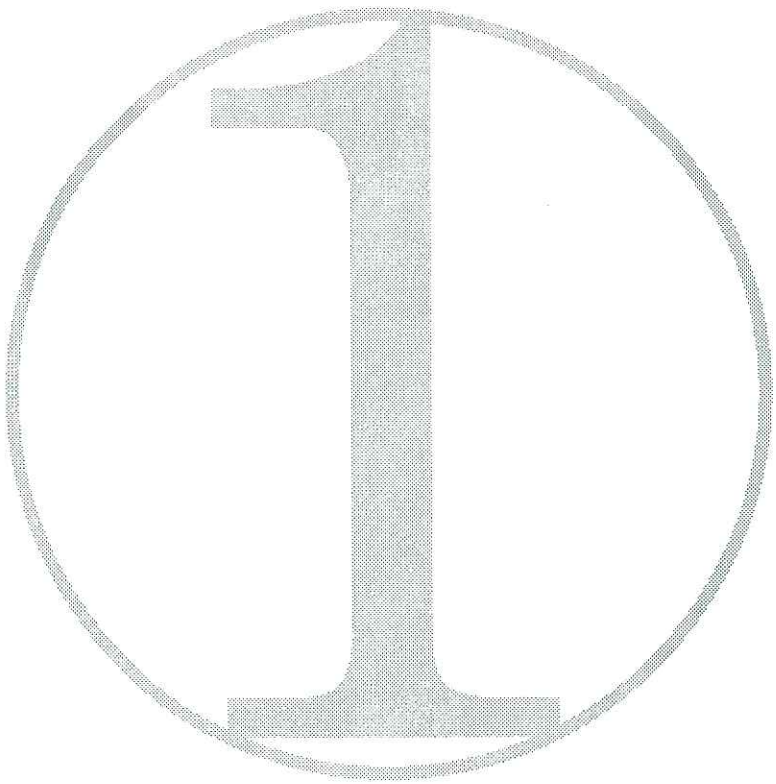
第一回入学試験問題

国語

時間 60 分

「注意」

- 1、放送で指示があるまで、この冊子さつしを開いてはいけません。
- 2、この冊子は19ページまであります。ページが足りなかったり、順序がおかしかったり、また印刷が不鮮明ふせんめいで読めない部分があったりした場合には、手をあげて監督かんとくの先生に申し出なさい。
- 3、問題についての質問は一切受け付けません。
- 4、下書きにはこの冊子の下書き欄らんや余白を使用しなさい。
- 5、字数指定のある問題では、句読点やカッコなども字数に含みます。



聖光学院中学校

一、次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 幸せな生活を送りたいというカンボウ。
- ② 責任を持って仕事をしているので、周囲の人々にシンライされている。
- ③ 仕事をさぼっていたら、シヨルイの山ができてしまった。
- ④ 彼は、この仕事におけるズノウ的な立場だ。
- ⑤ 将来のためにヨキンの残高を調べておこう。

二、日本には季節の変化や特徴を言い表した言葉がいろいろあります。次の①～⑤の会話の中にあるそうした言葉に目をとめ、それぞれの会話が四季のうちの季節に交わされたものかを、例にならって、漢字一字で答えなさい。

例
「やつとのんびりと歩ける気温になってきたね。」 「おぼろ月が出る季節になって、ずいぶん過ごしやすくなってきたよ。」 (答) 春

- ① 「新緑が目立つようになってきたね。」
「散歩をしている、風かおる季節になったと実感するね。」
- ② 「空気の澄んだ高原で空を見ると、いわし雲がきれいに見えるね。」
「夜になると、横浜では見られない天の川もはっきり見えるんだよ。」
- ③ 「今日は節分だから豆まきをしなきゃ。」
「誰が鬼の役やる？ 去年、子供たちに囲まれて大変な思いをしたから。今年は勘弁してね。」
- ④ 「そろそろ八十八夜になるから、畑仕事も忙しくなるぞ。」
「今年は、去年よりもたくさん収穫できそうだから、お手伝いの人数を増やそうね。」
- ⑤ 「今日は、昨日と比べて日差しがあつていいね。」
「こんな日のことを、小春日和というんだね。」

三、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「眠れない？」

何度目に起きたときだったか。電気をつけてぼんやりと座っていると、灯りに気づいたお父さんが、あたしの様子を覗きに來た。

「……うん。何か、あんまり」

お父さんはあたしの前に座った。ネクタイはゆるめて、でも喪服のまま。こういう格好のお父さんを見ることはあんまりないから、何だかちよつと、変な気がする。

「涼香。ちよつと、いいかな」

「何？」

「あのね……おばあちゃんのこと、なんだけど。おばあちゃん……おじいちゃんが死んで、ひとりぼっちになっちゃった、だろ」

「……うん」

「だからね。一緒に、住もうと思うんだ。お母さんや叔父さんたちとも話したけど、それが一番いいと思うんだ」

「え？」

おばあちゃんと、一緒に、住む？

「それって……あの、おばあちゃんを東京に呼ぶってこと？」

「——いや、そうじゃなくてね」

① お父さんは、少しだけ口ごもった。

「ここにね。おばあちゃんの家には、引っ越してくることに、しようと思うんだ」

「……引っ越し？ いつ？」

「卒業式が終わったら、すぐに、ね。半端な時期に転校してくるよりは、入学式からいたほうが、涼香の中学生活のためにもいいんじゃないかと思うんだ。どう？」

「……………」

すぐには返事ができなかった。これはたぶん、ぼんやりして頭が働いていないせい。

あたしの沈黙をお父さんは誤解したようだった。あたしが引っ越しに反対している、って、そういうふうに。

「お父さんは長男だし。それに、東京の家は、四人で住むにはちよつと狭い^{せま}だろ。ここなら充分^{じゅうぶん}な広さがあるし、東京に新しい家を借りるよりは」

「……でも、お父さんの、会社は？ 新しい会社に入るの？」

「ここからだつたら何とか通えるよ。途中^{とちゅう}、新幹線に乗らなきゃならないけど、ね」

「……………」

「涼香。いいだろ？」

何て答えたらいいのか、よくわからなかった。

② あたしは無言で、小さく頷いた^{うなず}。

お父さんはほつとしたような顔を見ると、軽くあたしの頭を撫^なでて、祭壇^{さいだん}のある居間のほうへと戻^{もど}ていった。

引越^{ひき}し。

ちよつと予想外の展開に、あたしはすっかり驚^{おどろ}いてしまう。

ここに、住む？

今まで、考えたこともなかった。

嬉しいか、嫌^{いや}か。訊^きかれたらもう、答えは決まっている。嬉しい。たぶん、すごく。

おばあちゃんの家は、すごく好き。

どこかの^{*}ペンションか別荘^{べつそう}みたいな雰^{ふん}囲^い気^きのある、二階建ての家。おじいちゃんが退職してから建てた（らしい）家だから、まだそんなに古くない。おじいちゃんとおばあちゃんは、自分たちが死んだあと子供たちが別荘として使えるようにって、思いっきりお洒落^{しゃれ}に建てたんだって。

海辺の町も、好き。

すぐ近くにある森も、大好き。

ここに遊びにくるのは、いつだって楽しみだった。海で遊んで、森で遊んで——それが、毎日になるってこと？

ここに住んで。中学に通って。これから先、たくさんの、数えきれないほどの時間をこの場所で過ごして、そして。

この町が——あたしの故郷になる。

A

制服を着て、鏡の前で、くると一回転。

中学の制服は、セーラー服。

行くはずだった区立中学の制服はブレザーにリボンタイで、それはそれで可愛いんだけど、どっちかっていうとあたし、セーラー服のほうが好きだ。

スカートは膝丈。襟のラインは二本。襟元はスカーフ。たぶんこれって、一番スタンダードな形なんだろうな。

「似合うじゃないの」

何だか嬉しそうに、おばあちゃんが言う。

「涼香ももう中学生なんだね。ついこのあいだまで、こんなにちっちゃかったのに」

「スカーフ、曲がってるわよ」

これはお母さん。

「うまく結べないの」

「しょうがないわね」

お母さんはあたしのスカーフをほどいて、そしてもう一度結び直す。ふわりとやわらかく、綺麗な形に。

「いつてらっしゃい、涼香」

声に送られて、あたしは家を出る。

記念すべき中学生生活第一日目。

B

「西依さん、一緒に帰ろ」

帰り際、下駄箱のところで声をかけられた。

セミロングの髪の毛の、少しだけ気の強そうな眼をした、地味だけど整った顔の女の子。確か同じクラスで、すぐ前の出席番号の娘で、名前は——名前は、何だっけ。

「えーと、あの……」

「名村。名村麻子っていうの」

さらっ、と、自然に彼女は自己紹介をした。

「越してきたばかりじゃ、いろいろわからないこと多いでしょ。いろんなとこ見ながら帰ろ。あ、もしかして急いでる？」

「急いでは……ない、けど、でもあの、帰る方向とか」

「一緒一緒。西依さんの家って、坂の上のペンションみたいな家でしょ？
わかつちやった。うち、すぐ近所なのよ」

少し低めの、不思議な声。

その声は、静かで落ち着いた響きを持っていた。凜とした表情の、どこか神秘的な雰囲気を用意した人。
昇降口を出ると、名村さんは裏門へと向かった。向こうのほうにとっておきの場所があるのよ、と、
そう言うて。

アスファルト道路から未舗装の道路へ。これは森のほうへと続く道？
並んで歩きながら、名村さんは自然な感じであたしに話しかけてくる。

「西依さんって、東京から、来たんだよね」

「あ、うん」

またか。

③ 少し、うんざりしてしまう。

確かにあたしが東京から来たのは本当のことだし、他の土地から来た人間に興味があるつても、
からなくは、ないのよ。

でも。でも、ね。

「——東京？」

一番最初にその話をしたのは、ひとつ後ろの席の、野沢さんという、ポニーテールの元気な女の子
だった。

「西依さんって、東京から来たの？」

野沢さんは、珍しいものでも見るような眼で（実際珍しかったのかもしれないけど）あたしを見て、
それから、言った。

「東京、ってことは、もしかして芸能人に会ったこととか、ある？」

「え、何、芸能人がどうしたの」

近くにいた娘——確か吉田さんっていったと思う——が、興味津々といった顔で話に加わってくる。
「あのね、西依さん小学校のときは東京にいたんだって」

「東京？」

たった一言。④ 東京、の一言だけで、集まってくる、女の子たち。

「いいな。東京って、カッコいい男の子とか一杯いるんじゃない？ ね」

「うん、やっぱ、センス違うよね。ノートとかペンケースの中身なんか全然違うもん。このへんの文房具屋じゃ、そんなの売ってないし」

「彼氏、とかも、いたんじゃない？」

「東京だと、いろんなところで遊んだでしょ。ねね、どんなところが面白い？」

あの。

そういうふうに、盛り上がられても。

言っちゃ何だけど、あたし自身、は、あんまりその、都会的とか何とか、そういう言葉とは無縁なよね。休みの日だって街へくりだす訳でもないし、遊んだり買い物したり、つても小学生の小遣いレベルじゃ高がしれてるし。

そりゃあね。同じ十二歳でも、テレビに出てるタレントみたいに、すらっとして大人っぽいってんなら話は別よ。それだったら彼氏の一人や二人くらい、いるかもしれない。

でもあたしは、身長、低いし、ついでにやせっぽちだし。

この歳で背が低いと、どうしたって子供っぽく見えちゃうんだよね。身長一三八センチ、体重二十八キロ、なんて、ほとんど小学校中学年サイズ。みんながイメージするような『都会』を背負うには、これってかなり*₂ ミスキャストなんじゃないかと思う。

前の学校のこととか、いろいろ訊かれるだろうな、くらいのことは思っていた、けど。でも^⑥よもや、こういう形の期待をされようとは、夢にも思わなかったわよ。

教室でも。それからこんな帰り道でも。もしかして、ずっと、東京東京って言われるのかなあ。それはちよっと、やだな。

「……淋しくない？」

「え？」

名村さんの言葉が意外で、ほんの少し、驚いてしまう。

「東京って、地図で見るとわりと近いけど、でも結構距離あるじゃない。今までの友達とかとも滅多に会えないだろうし……そういうのって、淋しくない？」

「あ、うん、手紙書くことにしてるし。それに、一番仲のよかった娘、私立の中学行くことになってたから。離れる覚悟は、ずっと前から、できてたし」

そりゃ、全然淋しくないって言ったら、それってたぶん、嘘、になっちゃうだろう。

でも、今の気持ちは、淋しいっていうのとは、ちよっと違う気がする。

少し離れたところに、ぼんやりと煙る、淡いピンク色の塊が見えた。塊——ううん、そんなもん
じゃない、もう、一面の、ピンク。

桜——だ。あんなにたくさん。

「こっちこっち。足もと滑りやすいから気をつけてね」

ひよい、と軽い仕草で名村さんは道から外れる。未舗装の小道から、森の中へ。

森の中——小道、じゃ、ないの。いきなり森の中、どうにか人が一人通れる程度の、はっきり言って

獣道。^{*3}あたしは名村さんの後ろを歩いて……あれ？

「あの、名村さん」

「何？」

「方向……違つてない？」

周りの樹に隠れてしまつてここからは桜は見えないけれど、少なくともこっちの方向じゃなかった、
と思う。

「いいの、こっちで」

⑦ 桜、じゃ、なかったのかな。目的地。

ときどき、思い出したように言葉を交わしながら、あたしたちは、ゆつくりと歩いた。

ううん、この言い方は正確じゃない。正しくは、『ゆつくりとしか歩けない』。

森の中、訂正。これつてばもう、完全に山の中よ。薄暗い斜面の獣道を、近くの樹につまりながら
歩いて。あ、あたし、あんまり体力ないんだけど。

「あ、あの、まだ歩く……の？」

駄目だ、息が切れる。そんなたいした距離を歩いた訳でもないというのに。

「もうすぐよ、本当に。ほら」

名村さんの指差した方向に、光。

樹の枝のあいだから、差し込んでくる光。そして、木の葉のあいだから覗く青空。その中に、
足を踏み出して——踏み出し、て。
⑧ 一歩

「うわ……あ……」

思わず、声が出てしまった。

広い場所では、なかった。けれど。

一番最初に目に入ってきたのは、黄色。足もとを埋め尽くす、一面の蒲公英。

そこは、斜面、ではなくて。頂上、でもなくて。

何て言ったらいいんだろう。これはまるで——そう、山の途中に作られた、天然の展望台。

眼下に広がる、町。そしてその向こうには、ずっと遠くまで続く——海。何て広い海。

「すごい……」

茫然と立ち尽くすあたしの隣で、名村さんは、静かな表情で海を見つめていた。何も言わずに、ただ静かな表情で。

ふわり、と、やわらかな風が吹く。風の中に、わずかに潮の匂い。

「あたし」

しばらくの沈黙のあとで、先に口を開いたのはあたしのほうだった。

「あたし、ここ、好きだわ」

この場所と、そして、この町。

これは予感。あたしはきつと、もつともつとこの町のことを好きになる。

「そう？」

名村さんは、ほんの少し、笑った。

「よかった」

⑨ ふつ、と、あたしの中で何かが溶けていくような気がした。

さつきまで身体の奥に棲んでいた、ほんの少しの淋しさと——それから新しい土地と友達への不安。大丈夫だ。

海と蒲公英と、それから名村さんの横顔を眺めながら、強く確信する。

あたしは、大丈夫だ。

（飯田雪子『僕はここにいる』（講談社）による）

※問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

注 *1 ペンション……家庭的な雰囲気を用意した小さなホテル。

*2 ミスキャスト……映画などで、ふさわしくない俳優を役に割り当ててしまうこと。

*3 獣道……動物が行き来することで自然にできた、山の中の小道。

問一——線部①に「お父さんは、少しかけ口ごもった」とありますが、なぜですか。次のア、オの中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 涼香はおばあちゃんと一緒に暮らしたいと思っているだろうという予想が当たっていたので、思わず口もとがゆるんでしまったから。

イ おばあちゃんの家に引っ越しをするということを言ったつもりであつたが、涼香には真意が伝わっておらず、どう表現したらわかってくれるのかと悩んだから。

ウ 引っ越しをすることを涼香が嫌がるのではないかと恐れていたので、おばあちゃんの住む町に移り住むことをあらためて明言することがためらわれたから。

エ おばあちゃんと一緒に住むということ唐突に切り出したことに、涼香が困惑しているのがわかり、何を言っているのか分からなくなってしまったから。

オ 涼香がおばあちゃんの家に引っ越しことをあまりよく思っていないのがわかっていたので、ゆっくり心の準備をさせてあげたかったから。

問二——線部②に「あたしは無言で、小さく頷いた」とありますが、このときの涼香の心情を説明した文として最もふさわしいものを、次のア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おばあちゃんの家には引っ越したくないのだが、それを言い出せず、もどかしく思っている。

イ おばあちゃんの家に住むことに喜びをおぼえつつ、新しい生活への不安にさいなまれている。

ウ 急なお父さんの話に圧倒され、不覚にも返事をしてしまった自分自身に驚いている。

エ おばあちゃんの家に住みたいという夢がいきなり実現し、思わず飛び上がりがりたくなっている。

オ おばあちゃんの家引っ越しことは嬉しいのだが、あまりに突然の話なのでとまどっている。

問三

~~~~線Aから~~~~線Bまでの部分に使われた表現について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 会話文以外の文末に言い切りの形を多用することで、不安から逃れるために自分の気持ちをふるいたたせようとする涼香の胸の内を暗示している。

イ テレビドラマでカメラを切りかえるようなスピード感あふれる描写によって、涼香と母親の気持ちのすれ違いを鮮やかに表現している。

ウ たたみかけるようにカタカナ語をたくさん使うことによって、東京で暮らす中学生の都会的な雰囲気をかもし出している。

エ 文末を名詞で終わらせる形をたくさん使うことで、新しい生活を迎えようとしているはずんだ気持ちを表現している。

オ あえて普通の順序とは違う形で言葉を使うことによって、中学生になる涼香の不安定な心の内を象徴的に表している。

問四

——線部③に「少し、うんざりしてしまう」とありますが、この時の涼香の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いくら東京のことが珍しいからといって、会う人ごとに東京について詳しく説明しなくてはならないのがめんどろになってきている。

イ クラスでも東京から来たことばかり注目された上に、さらに名村さんからも同じことを訊かれて、嫌気がさしている。

ウ 静かで落ち着いた声の中に神秘的な魅力を感じさせていた名村さんが、クラスの生徒と同じことしか聞かなかったことに、怒りをおぼえている。

エ 東京から来たからといって、自分のことを「東京出身の子」という視点でしか見てくれないことに不安を感じている。

オ 転校したばかりでまだお互いのことを理解しあえていないのに、東京から来たというだけでなれなれしく話しかけてくる名村さんをうとましく感じている。

問五 ——— 線部④に「東京、の一言だけで、集まってくる」とありますが、どういことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 転校生である涼香への関心以上に、東京から来たということの方に周りの人が興味を持ち、話しかけてくるということ。

イ 東京という名前さえ出せば、周りの人が涼香に関心を示してくるので、自分の意志には関係なく人が集まってくるということ。

ウ 東京から来たことを周りの友達にアピールすることで、自分に関心を持たせ、友達を作っていることとするということ。

エ 中学校の女の子たちはみな東京で生活したいとあこがれているので、自然と東京から来た涼香に声をかけてくるということ。

オ 転校生の涼香に興味があるものの、どう話しかけてよいか分からず、東京から来たことを話のきっかけに語りかけているということ。

問六 ——— 線部⑤に「『都会』を背負う」とありますが、どういことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 彼氏の一人や二人はいて、そのうえ芸能人とも知り合いで、いつでも会いたいときに会えるというイメージを抱かれていますということ。

イ 東京に対して強いあこがれを抱いていて、都会育ちの子がやってくると、すぐにそこによっていく習性を持っているということ。

ウ 巨額の小遣いを湯水のように使って、お洒落で流行しているものは何でも買ってしまうような財力を持っているということ。

エ 都会から取り寄せたセンスのよいノートやペンケースを持っていて、東京の地理についてもくわしい知識を備えているということ。

オ 年齢よりも大人びていたり、持っている物も洗練されていたり、地方にいてはできないような面白い経験を積んだりした人間として振る舞うということ。

問七 —— 線部⑥に「よもや」とありますが、この言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 背の高い父でもよもや、柵に手が届かないこともあるう。  
イ 彼はいつも失敗ばかり繰り返すので、よもや今回も失敗した。  
ウ 山の天気は変わりやすいけれども、よもや雨が降るかもしれない。  
エ あれほど念を押しておいたのだから、よもや約束を忘れないだろう。  
オ ニリットルの水でもよもや、この暑さの中では足りないかもしれない。

問八 —— 線部⑦に「桜、じゃ、なかったのかな。目的地」とありますが、これから行こうとしている目的地を名村さんは何と呼んでいますか。本文中の言葉をぬき出して答えなさい。

問九 —— 線部⑧に「一歩足を踏み出して——踏み出し、て」とありますが、この部分の表現について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 都会育ちで体力がない自分が、息も絶え絶えになりながらも、夢にまで見た目的地にようやく到達しようとしている状態を表している。  
イ 自分の思い描いていた以上の風景がいきなり目の前に広がって圧倒されてしまい、思わず足が止まりそうになった状態を表している。  
ウ あまりにも疲れてしまい、眼下に広がる風景に目がいかず、呆然としてしまっているが、足だけは自然に動いている状態を表している。  
エ 樹の枝のあいだから差し込んでくる光や、木の葉の間から覗く青空が眩しすぎて、前を向けずに歩いている状態を表している。  
オ 名村さんの案内してくれた場所の光景が期待通りのすばらしいものだったため、その場に立ちつくしてしまった状態を表している。

問十

——線部⑨に「ふつ、と、あたしの中で何かが溶けていくような気がした」とありますが、このときの涼香の心情はどのようなものですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新しい生活が始まり、ひとりぼっちの生活を送らなくてはならないことに淋しさや不安を抱いていたのだが、自分の気持ちを落ち着かせることができそうな場所を名村さんに教えてもらったことで安心している。

イ 最初は新しい土地や友達になじむことができなかったが、長い距離を歩いた苦勞の末にすてきな光景に巡り会えたように、いつかはここにも親しみを覚えるようになるに違いないと確信するようになってきている。

ウ 東京の友達と離れてしまったことに対する淋しさや新しい土地での生活に対する不安を抱いていたが、名村さんの笑顔を見ているうちに、こだわっていた今までの自分が小さく思えるようになってきている。

エ 住み慣れた土地を離れて孤独感を覚え、環境が大きく変わったことでいろいろ気がかりなこともあったが、名村さんと出会ったことやすてきな場所を知ったことでうまくやっていけそうだとほっとしている。

オ 東京のことばかり聞いてくる同級生に囲まれ、以前住んでいた土地に比べれば面白みに欠ける場所だと思っていたこの町が、名村さんのおかげで非常に魅力的な世界だと思えるようになってきている。

#### 四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

学校では、クラスの友だち同士で小グループを作って、休み時間などはいつも一緒に活動することがよく見受けられます。その時よくありがちなのが、<sup>①</sup>親しいはずなのに、その場にはいない友だちの悪口を言うということです。

これは今に始まったことではありません。社会学の考え方で、スケープゴートの理論というものがあります。

「スケープゴート」というのは、そもそも旧約聖書の中に出てくる、<sup>\*</sup>贖罪用の山羊のことです。旧約聖書の時代には、人間の罪を山羊に背負わせて荒地に放す、という宗教的な儀式がありました。つまり生贄ですね。そこから転じて、人々の憎悪や不安、<sup>\*2</sup>猜疑心などを、一つの対象（個人や集団）に転嫁して、矛先をそちらにそらせてしまうことを、「〇〇をスケープゴートにする」などと言います。さて、親しい友だちであるはずなのに、なぜこんなことをするのでしょうか。

これは、第三者（ここにいない、私とあなたそれ以外の人のこと）を排除することによって、その場の「あなたと私の親しさを確認しあう」ということなのです。A子さんとB子さんがいたとして、ここにいないC子さんの悪口を言って盛り上がることによって、A子さんとB子さんは、その場の親しさを再確認しているわけです。こういうことは、よくあることなのです。

けれど、こうした振舞いは、この二人に新たな不安を引き起こしがちなのです。その不安というのは、今度はいつ自分が排除される側にまわるかわからないということです。この結果またまた不安が増幅して、ますます固まるわけです。

私も、こんな光景を見たことがあります。

息子や娘がまだ幼稚園に通っているころ、私はよく送り迎えをしていました。その時、いつもお母さん方が、ひとかたまりに群れてお話をしていました。子どもたちはとくに教室の中に入ってしまったのに、お母さん方はほとんど帰らず、<sup>②</sup>多くの人がその場に残って延々とおしゃべりを続けているのです。お父さん方なら、お役目が済めば「じゃ、また」とすぐに帰りそうなものです。

私の妻にその話をするに「あれはその場にいないとなんとなく不安になるからかな。本当は、毎日毎日何十分もお話なんかしたくない人だっているでしょうに、その場にいないと何を言われるかわからないからなのかしら」と言うのです。

さらに、みんなが知っていて自分だけが知らないという状態を極端に恐れる、ということもあるよ

うです。たいした内容の情報でなくても、情報を共有していないと、そのことだけで排除されるきっかけにつながりかねないからです。

このように、ある種のグループでは、いつも関係を密にしていないと、いつ排除されるかわからない不安がつきまといまいます。不安になるから、ますます固まって一緒にいる。

学校の先生の立場から見ると、「あの子たちはいつも一緒にいてすごく仲がいいんだな」なんて思える子どもたちの集団でも、よくよく話を聞いたり、様子をうかがってみると、じつは非常に緊張した状態でいつも一緒にいるという場合があります。もちろん別に仲が悪いわけではなくて、一緒にいて楽しいこともあるのだけれども、いつのまにか「そこにいないと不安になるから、陰口をたたかれるのが嫌だから一緒にいる」という状態におちいつている可能性もあるのです。

その発展形といえるかもしれないのですが、最近私が③ちよつと気になっているのが「携帯メール」を介したコミュニケーションです。

とりたてて用事もないのに、しょっちゅうメールのやりとりをしている人がいますね。

メールを送ったら、どれぐらいすばやく「\*3即レス」してくれるかで、相手の友情や愛情を測ってしまう人も多いようです。返信が遅れたりすると、「なんですぐ返してくれなかったの?」「〇〇君の私への気持ちって、その程度だったの?」となるわけです。

これはじつは、非常に心が休まらない状態をお互いに作りあってしまったことになるのはしないでしようか。

メールを出したほうは、返事が遅いと不安になる。受けるほうは、即レスをしなければならないというプレッシャーがかかっている。そしてお互い、「友だちなのだから、あるいは付き合っているのだから、毎日メールのやりとりをしなければならない」ということになる。

本当は幸せになるための「友だち」や「親しさ」のはずなのに、その存在が逆に自分を息苦しくしたり、相手も息苦しくなっていたりするような、妙な関係が生まれてしまうことがあるのです。

私はそれを「同調圧力」と呼んでいます。

「同調圧力」という言葉を私の研究室のゼミで使ったとき、教え子の女子学生がこう言いました。「先生、私の高校時代は、まさに『同調圧力』に悩まされ続けた三年間でした!」

——とにかくいつも一緒に行動していきやいけない雰囲気があつて、それがとても重荷だった。抜

け出すにも抜け出せないし、距離を少しでもとろうとすると「なんか冷たい」とか、「今までとちよつと違う」などと言われ、いついじめの対象になるかわからない。距離をとって孤立するの怖い。そんな毎日——だったのだそうです。それが、大学に入ってからかなりの程度解放されて、「」という雰囲気が出てきたので、とても楽になったそうです。

「同調圧力とどう折<sup>④</sup>り合いをつけるかが私のテーマだったんだと、いまはつきりわかりました」と、彼女は長年の胸のつかえがとれたように言いました。

今までもやもやと不快だったことが、こういうキーワードを与えられることでスッキリすることがあります。

この場合の彼女も、それまでは、仲間に入れてくれて、いつも誘<sup>さそ</sup>ってくれるグループのみんなに対して、「息苦しい、距離を置きたい」と思っているのは、自分に協調性がないからなのだろうか？「友だちだと思ってくれている彼女らに対して悪いのではないか？」「でも息苦しい、たまには一人で行動したいけど、その気持ちをうまく言えない」と、ずっと悩<sup>なや</sup>んでいたのではないのでしょうか。

同じ年代の若者が集<sup>つど</sup>う同質の集団である学校という場合は、どうしても同調圧力が高まる傾向<sup>けいこう</sup>が強いようです。

自分の好みとは関係なく、みんなと同じような制服の着崩<sup>きぐさ</sup>し方をしたり、今流行のバッグなどを友だちといっしょに持ったりする、またその時期に流行<sup>はやり</sup>っている若者言葉をつい使おうとする——本当に自分で選んでそうしているというよりも、一人だけ浮<sup>う</sup>いてしまうのが恐い、ノリの悪いヤツと思われるのは嫌だから、つい周りに合わせてしまうことはありませんか。

いろいろな形はあるにせよ、私たちの身の周りには、さまざまな種類の<sup>⑤</sup>同調圧力が張り巡<sup>めぐ</sup>らされているのです。

（菅野仁『友だち幻想』（筑摩書房）による）

※問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

注 \*1 贖罪……罪をつぐなうこと。

\*2 猜疑心……相手の行為をねたんだり、疑ったりする気持ち。

\*3 即レス……メールを受信したら、すぐに返信すること。

問一——線部①に「親しいはずなのに、その場にはない友だちの悪口を言う」とありますが、なぜ

【下書き欄】らん——必要ならば使いなさい。

問二——線部②に「多くの人がその場に残って延々とおしゃべりを続けているのです」とあります

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

問三——線部③に「ちよつと気になっている」とありますが、どういうことが気になっているのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア メールによるコミュニケーションしかできず、相手の気持ちを返信の早さでしか判断できない人が多いこと。

イ 相手の都合も考えずに、特に用事もないのに常にメールを送らずにはいられない不作法な人が多いこと。

ウ メールを出してすぐにその返信を読むという単純な作業をするだけで、相手を信頼しんらいしてしまう人が多いこと。

エ むやみにメールを送っては、相手からすぐに返信が来るのが当たり前のことだと思っている人が多いこと。

オ 自分だけ持っていないと不安なので、みんなと同じ携帯けいたいを買ってメールのやりとりをしている人が多いこと。

問四 本文中の  にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 敵の敵は味方

イ ナンバーワンより、オンリーワン

ウ 人は人、自分は自分

エ いまを大切に生きよう

オ あきらめたら終わり

問五 — 線部④に「折り合いをつける」とありますが、この言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　夏休みに向けて出された課題がとんでもない量で、どこから折り合いをつけたらよいかが分からない。

イクラブ活動の話となると、いつも二人は意見がぶつかるが、どこかで折り合いをつけなくてはならない。

友人の書く字はあまりにもすばらしく、有名な書道の先生に頼んで、どうにか折り合いをつけてもらった。

エ 長い間苦勞をしたが、難しい区間の工事が無事に終わり、トンネルの開通にどうやら折り合いがついた。

オ　お母さんは、いつも人のあら探しをしては、どんなことにも折り合いをつけずにはいられない性格だ。

問六——線部⑤に「同調圧力」とありますが、これを三十字以内のわかりやすい表現に言い換えなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。